



椎名誠写真展「五つの旅の物語」より(6月19日まで、富山県高岡市ふくおかカメラ館)より

文

化

東日本大震災で壊滅的被害を受けた被災地で、文化復興に向けた支援が動き出す。機敏な非営利組織(NPO)が、現地を支えるネットワークを構築している。

避難所に中継

「あれは感動したなあ」。宮城県南三陸町で水産業を営む山内正文氏が日焼けした顔をほころばせた。「借金だけは右肩上がり」と嘆く同氏が懐かしむのは昨夏の「きりこ」プロジェクトだ。三陸地方は祭りや民俗芸能が盛ん。海は災厄の一方で漁の恵みをもたらす。大いなる自然と共存する祈りの文化が根づいている。神主が紙を切つて作る伝統的な縁起物の「きりこ」も鮮やかだ。プロジェクトに参加した地元的女性たちは町の記憶を尋ね歩き、その物語をもとに「きりこ」を切つて通りに飾った。

震災2カ月の5月11日、この町で慰霊の集いを企画したのは「きりこ」プロジェクトを手がけた仙台のグループ「ENVISION 311」(AVN)だ。「南三陸の思いを海に届ける日」(プロデュサーの吉川由美氏)とした。高台の志津川中学校から町を見下ろしても、今は建物の残骸のほか何もない。校庭でフォーレのレクイエムなどを聴いた生徒や避難者がろうそくに火をともし、海に祈った。

催しが遠くの避難所にネット中継されたのは、町の絆を保つため。同町

産業振興課の宮川舞氏は話す。「きりこ」が、ふるさとの思いを寄せるきっかけになれば。いつか皆

クが必要だ。ところが、行政機関は救援で手いっぱい。その空白を埋めるのが、アートNPOや民間の団体だ。

ニーズ調べ派遣

仙台では演劇人が「アートリバイバルコネクション東北」を発足させた。

被災の現場で求められる活動を調べ、俳優による絵本の読み聞かせやダンスによるストレッチ体操などニーズに応じてアーティストを派遣。場を失った東北のアーティストが他地域で発表できる

よつ協力を仰ぎ、仕事のない舞台スタッフに仮設住宅建設の職などを求めているという。メンバーで劇作家、演出家の石川裕人は先の連休期間中、キャラバン隊を組んで岩手、宮城の

北文化学園大学の志賀野桂一教授らが東北のアーティストのために支援団体を6月にも発足させる。阪神大震災で「アート・エイド・神戸」の運動を推進した画廊主、島田誠氏が連携を表明。

盛岡でも、特定非営利活動法人(NPO法人)「いわてアートサポートセンター」に「いわて文化支援ネットワーク」が開設された。旗振り役の坂田裕一・盛岡市中央公民館館長は「学校の芸術鑑賞事業がなくなった。盛岡の音楽家を中心に合奏団をつくり、6月に県北へ派遣する。七夕の太鼓フェスティバルで有名な陸前高田市では大量の和太鼓が流失した。支援したい」と語る。

行政の空白を埋め

町の絆と活力紡ぐ

団体だ。

3月24日にいち早く復興支援ファンドを開設した東京の企業メセナ協議会は1カ月を経ずに第1次助成(245万円)を決定。「ENVISION」以外にも、病院の空間を彩る試みをしてきた「アーツ・フォー・ホープ」が切り絵や人形作りのプロジェクトを実施。宮城

民間の支援

が欠ける中、現地のネットワークに資金を送るのは、民間の支援

して地域で動いてもら

は子供の未来をアートで開く活動を援助する。文化復興の柱は子供と地域だ。AVNは「登録したアーティストを派遣して地域で動いてもら

う。将来を担う子供の力になるアートを(事務局)と意欲を示す。AVN事務局に加わる吉本光宏ニッセイ基礎研究所主席研究員も「芸術を通して地域の活力を生む新しい仕組みができた」と期待する。

地域の内的発展と結ぶ文化の力が試されるのはこれから。学生ボランティアを推進した東北芸術工科大学(山形市)の宮本武典・美術館大学センター主任学芸員は「アートはコミュニケーションをつくり、伝統的な価値を目に見えるようにする。まずはお祭りが大切になるだろう」と話している。(編集委員 内田洋一)

被災地と支援者結ぶ アート復興 NPO機敏



追悼イベントで、志津川中学校の生徒がキャンドルを飾るなか演奏するアーティスト(11日、宮城県南三陸町) 写真 小林健

追悼イベントで、志津川中学校の生徒がキャンドルを飾るなか演奏するアーティスト(11日、宮城県南三陸町) 写真 小林健

追悼イベントで、志津川中学校の生徒がキャンドルを飾るなか演奏するアーティスト(11日、宮城県南三陸町) 写真 小林健

追悼イベントで、志津川中学校の生徒がキャンドルを飾るなか演奏するアーティスト(11日、宮城県南三陸町) 写真 小林健